読者の声

「中古ユニットの見直しを」

●美唄歯科医師会会員
小森　英世

亡父への介護のささやかな経験から，二，三感ずる事があったので，この場をお借りして述べてみたい。介護という言葉が広く使われているが，大きな意味で治療の枠組みの中にあり，病態の改善につながるいわば“攻めの介護”が望ましい事は言うまでもない事である。咬合の回復が，その意味で生活全般を改善させると共に，脳の賦活化を促すのではないかとは，既に指摘され認識されてきていると思う。また，食べ物の経口摂取なくしてどうして生きがいが図られようか。手足をベッドにしばりつけ，鼻から栄養を与えて事足れりとする医療からは，患者を人間として扱っているのか，また本当に治そうとする気持ちと医療技術・ノウハウを持っているのか疑問を感ぜざるを得ないケースがある。即ち，ノウハウの程度に応じて，患者の自由度は高まり改善が期待される。口腔に対する認識の程度からみると，そのようにきつい事も言いたくなる。血圧や血糖値やＧＯＴ，ＧＰＴ等は，人間の生きようとする意欲と無関係に存在するのであろうか。医療関係者が，飲みかつ食べる楽しみを奪われてどれ程我慢して生きていられるのであろうか，ましてや患者においては然り。

嚥下と口腔清掃の管理は，治療と介護の根幹に触れるものとの認識がなければ，患者や被介護者は，介護制度という官僚主義の犠牲になるだけであろう。

歯科ユニットは，ゴミとして処理されるべきではない。中古ユニットの持つ安価で，リクライニングの機能，うがい，照明のある利点は，たとえタービンが使えなくとも現在供されているベッドよりははるかに優秀である。勿論，正常に動く歯科診療ユニットが，各病院や老健施設等に最低一台は常備され口腔が管理されるべきとは思うが，日常のベッドとしてもその利点を見直されて良いと思う。

配管設備はネックとなるが，口腔の薄暗がりの中で，事を運ぶ認識は過去のものとしたい。引き取り手と流通が，商業ベースに乗り十分ペイするシステムのできる事を望んでいる。地域振興券やパソコン融資で消費を図るよりも身近で切実なのではあるまいか。

政府が思いつくには，まず関係者からのアドバイスが必要であろう。種をまかなければ実はならない。私達の時は，なんとかそのようなベッドできめ細かな介護や医療を受けたいものだ。それは高望みだろうか。